

正体不明と不運な閻魔～閻夜の神と二人の巫女～

留宮七日

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

絵画の世界から戻ってきた七日達、探偵事務所へ帰ると待っていたのは……。

今作はシリアスなところもあれば、コメディも若干混じっています

それらが苦手な方はブラウザバック推奨です

## 目次

第0話	「地獄へ招待？」	1
第1話	「腕試し？死神vs正体不明」	5
第2話	「決着？初めてのお仕事」	9
第3話	「再開？正体不明の妹」	13
第4話	「逃げ出した罪人と断罪する正体不明」	17
第5話	「正体不明の幻想郷観光」	25
第6話	「フランとの弾幕ごっこ」	31
第7話	「霊夢が消えた？」	35
第8話	「消失による変化」	40
第9話	「動き始める異変」	55
第10話	「選ばれし巫女」	62
第11話	「差出人は龍神様!？」	70
第12話	「割れた結界と二人の神」	77
第13話	「戻ってきた二人の神と新たな巫女」	85
最終話	「異変の終わりとその後」	100

## 第0話 「地獄へ招待？」

く現代 留宮探偵事務所く

「……ここがあのほうがやっている探偵事務所ですか……。」

「そのようですね……。」

「でも。カギが開いてませんよ?」

「きつと出かけているのでしよう。仕方ありません、ここで待ちましよう。」

七日達が帰ってくる30分前……その人物達は探偵事務所の前で待っていた……

その頃……

く事務所前 メインストリートく

「さて……もう夕方か、フラン、どうする?」

「うくん、お兄様が決めていいよ。」

「そうだな……寒いし鍋にするか……多分客人が来るからな。」

「え……?」

そんなことを言いながら七日とフランは買い物済ませた。

く30分後 留宮探偵事務所く

「ふう… だいぶ時間がかかったな。」

「そうだね〜…。」

そう言つて階段を登っていると事務所の扉の前に二人の人影がいて、近づくと気づいたように話しかけてきた

「あら、戻ってきましたね。」

「そうですね〜…。」

「… ほらな?」

「… (・ω・)」

「ま、立ち話もあれだしお二人共事務所へどうぞ。」

「わかりました、お言葉に甘えましょう。」

「了解です。」

そうして、七日達は事務所へ入った、入るとその人物たちは話し始めた。

「はじめまして… というべきでしょうか、私は四季映姫と申します。今回はお願いがありました。」

「映姫さんね、んで? ようはなんですか?」

「私は幻想郷で閻魔をやっているのですが、断罪判決をやる担当

の者が急遽失踪してしまいまして…。そのため、あなたに代わりにやってもらえないかと頼みに来たのです。」

その頼みごとに俺はすぐに答えは出せなかった…。がその数秒後俺はこう答えた。

「わかった。その担当、やらせてもらうよ。が条件がある。」

「はい、なんででしょう?」

「俺の能力は幻想郷に行く【物体の動きを止める程度の能力】になるんだ、だから紫に能力が変わらないように交渉しといて欲しいんだ、いいか?」

映姫は少し驚いたような表情をしてこう答えた。

「わかりました、交渉しておきましょう。では、お暇させていただきませぬ。」

「ちよ、映姫様待つてくださいいよく…。。」

「あ、映姫さん、と小町だったか?これから鍋するんだけど食べる?」

「え、あ…。えくつと…。どうします?映姫様。」

「それじゃあお言葉に甘えて頂きましょうかね…。作るの手伝いますっ。」

「いや、大丈夫ですよ。それまでフランと話でもしててください。」

「(そういえば、私の名前小野塚小町ってなのったっけ?)」

そのあと全員(美雨も含め)で鍋を食べた。

く夕食後く

「それでは、明日迎えに来ますね。」

「ごちそうになりました!」

「いいよいよよ、ああ、わかった。じゃあ、また明日。」

そう言うのと、映姫たちは帰っていった……。

「さて、俺らも行く準備するぞ、美雨。」

「はいはい、所長。」

「しばらくはこの事務所には戻ってこれないからな。」

「そうですね、準備して、寝ましょう。」

「そうだな、おやすみ。」

「おやすみ。」

そうやって二人は就寝した……。

く第1話へ続く……

## 第1話

### 「腕試し？死神VS正体不明」

～現代

留宮探偵事務所～

「ふあ…あ…。よく寝たよく寝た。」

「あ、起きましたね所長、もうそろそろ四季さん達がきますよ。」

「ん…？あ、ああ。わかった…。」

～10分後～

ピンポ～ン

「お、来たな。」

「みたいですね。」

ガチャ…。と音を立てて入ってきたのは…。

「おokus、お前ら地獄に逝くんだろう？俺も連れてけよな！」

「おい、漢字漢字、変換おかしいって…。」

扉を開けて入ってきたのはなんと紅だった…。

「あらあら…。客人が増えたようですね…。」

「あ、すみません。映姫さん、一人追加で…。」

俺がそう謝罪しつつお願いすると映姫は笑って「いいよ」と答え



てくれた。

「それじゃあ、行こうかね、3人とも。」

「そうですね、行きましようか、地獄へ。」

「はあ…… めんどいのが1人増えて行くはめになるとは……。」

そういつつ、七日達は地獄へ向かった……。

〔幻想郷 地獄〕

「…… (・ω・) (七日)

「…… (・ω・) (美雨)

「…… (・ω・) (紅)

「「(くつそ暑い……) (・ω・)」「」

「さ、つきましたよ、ここがあなたたちにしばらく住んでもらう住居です。」

英姫に連れてこられた場所は見るからに高級そうに見える家だった……。

「え……、こここんなところに住んでいいのか？」

「ええ、構いませんよ、さて、七日さん、ちょっと来てください、おふたりは中でくつろいでいていいですよ。」

「……………？わかりました。紅、美雨、先入っつけ。」

「あいよう」

「りようかいです。」

そう言っつて二人は中へ入っつていった。

「んで？ようはなんですか？」

「ええ、用はですね小町と腕試しを兼ねて弾幕勝負をして欲しいのです。」

「へ？」

「え!？」

「そんなわけをお願いしますね♪」

【ね♪】「じゃないですよ……………」

「あたしは別にいいですよ、七日さんの力量も見てみたいし♪」

「はあ……………わかった、受けてやる。見せてやる、正体不明の能力つてやつを！」

「じゃあ、始めましょう、弾幕勝負を！」

「「スペルカード！」」

二人は同時にそう叫んだ。

七日はそれと同時に腰からキーホルダーのようなもの空中に高く投げこう言った。

「スペルカード 創生【死神の大鎌】」

七日がそう叫ぶと、空中が輝き、降ってきたのは背丈の倍はあるうかという鎌だった…。そして七日は降ってきた鎌の柄を空中で掴むと同時にこう言った……。

「んじやまあ、第一スペルと行くか、スペルカード深淵【弹幕協奏曲】」

七日がそういうと同時に鎌は床に突き刺さり魔法陣の中から様々な色の弹幕が襲いかかっていった……。

く第2話へ続く……

## 第2話 「決着？初めてのお仕事」

く幻想郷 地獄く

「第1スペル、深淵【弹幕協奏曲】」

「えっ、まじかい。その威力で第1スペル!？」

「そう言いつつ、小町もスペルを発動した…。」

「そんなじゃ、私も、スペル、っていつても2つしか使えないけど、スペル死歌【八重霧の渡し】」

小町がそう言うと、周りに無数の弹幕現れ、七日に向かって襲っていった。

「うわあ…： めんどくせえ…：。 スペル 奇術【氷柱結界】」

スペルの弾幕が当たろうとした瞬間氷の柱が攻撃を防いだ。

「うっそ…：。」

「あはは、そんな弱い攻撃じゃ…：。 ねえ？あ、そーいや映姫、これ何機制?？」

「2機制ですよ。」

「了解。」

「スペル、禁断【カミサマの加護】、第2スペル 禁術【弹幕結界・黒薔薇】」

そう言うと、小町の周囲からだんだん迫るように黒い弾幕が襲っていった。

「え、ちよ、無理だわ……」

それと同時に小町に一つ被弾した……。が、それで終わるはずもなく……。

「ラストスペル 断罪【断罪判決・炎】」

そして、追い打ちをかけるように七日の鎌は深紅に染まり、周りはサウナのような暑さになった……。

「さ、これで終わりっ！」

その鎌を小町に向けて人風した……。

「ぐっ……！」

「勝負あり……ですね、なるほど、さすが幻想郷で異変を起こしただけありますね。」

「なんだ、知ってたんですね。」

「あたりまえです。」

「いてて…… 七日さん…… 手加減くらいしてくださいよ……。」

「いやいや…… 俺勝負事は手を抜かないので。」

「まあ、そこらへんはいいとして、さっそく仕事をしてもらうのできてください。」

「は、はあ……りようかいです……。」

そうして、七日は仕事場へ行つた……。ちなみに弾幕勝負をしている間美雨たちは……。

「紅さん、紅茶とクッキーができたよ。」

「お、うまそうだな、にしても七日おせえなあ……。」

「きつと弾幕勝負でもしてるんでしょ、さつきから爆音してるし。」

「そっか、なら心配ねえな」

……こんなことをしていました……。

～仕事場～

「はい、ここで私が黒と判決した人の記憶を見てもらい、断罪すべき人はあなたが。断罪しなくてもいい人はほかの担当に回してください。それだけです。」

「あ、了解です。じゃあ、始めましょうか。」

～数分後～

「え……なにこの人数……ぱつと見ただけで80人はいるぞ……こりや失踪するわな……。」

「ん？こいつは… 断罪すべきやつか。」

「断罪【断罪判決・氷】か、ならお前は無制限水結刑だな。」

そして、七日はその罪人に鎌を突き刺した…。

こんな作業がなんと16時間続いたのであった…。

く第3話に続く…

### 第3話 「再開？ 正体不明の妹」

く幻想郷 地獄 七日の仕事場く

「はあ… ほんとにどいつもこいつも白… 黒いやつなんかごく少数じゃねえか…。」

七日はため息をつきつつ周りを見渡していた。

「どうすっかな… 英姫からは仕事がないときは自由にしていって言われてるし…。」

七日は少し考えたあと思いついたように口に出した。

「うしつ、久々にスペル作りするか。最近スペルも消費激しいし」

そう言っつてその場で白紙のスペルカードを取り出しそれに魔力を込めた。

く10分後？「くくく」く

「んくと… 絵には… 闇？が自分の周りから吹き出てるな…、そうだな… スペル名は——。だな」

「ついでにもう一枚つと… こっちは？ 弾幕が鎌の斬撃の切れ目から出てる… なるほど、こいつのスペル名は禁忌【ヘルストーリー】とでもするか。」

そうして、スペル名をつけると、2つのスペルカードは光となつて消えた。



そして、そうこうしていると、映姫は仕事を終えたようでこちらに話しかけてきた。

「今日は黒はいなかったようです。」

「みたいですね、俺の仕事が全くないですよ、まあ、それでもいいですけどね?」

「あ、そうそう。先ほどあなたにお客が来ていましたよ。」

「俺に?… なんかいやくな予感が…。」

「確か名前は――

映姫が名前を言おうとした瞬間、後方13メートルくらいから弾幕が俺めがけ飛んできた。

「っ!?!簡易式結界・黒薔薇!」

正体の見えない弾幕は結界に当たると結界が崩れた…、それと同時に聞き覚えのある可愛らしい声が聞こえた。

「留宮流弾幕術壱の型【黒薔薇】ってね、久しぶり、お兄様♪」

「んな… め、姪蘭!」

その声の主は、高校1年生で七日の妹、留宮姪蘭（ルミヤメイラ）だった…。

「なんだ、客ってお前のことだったのな。」

「そうよ、せっかく探偵事務所に行つたのにいないんだもの。それでフランちゃんに聞いたら地獄に行った、って言われたから会いに来たんじゃない。」

「んで？用は何かあるのか？」

「点検よてんけん。お兄様の大鎌、点検するのは6年ぶりじゃない。」

「ああ、そっか、お前だもんなこの鎌作つたの。点検してもらうの忘れてたわ。」

「忘れないで欲しいわよ、さ、家にもどりましょ。」

「あ、おお、んじやな映姫、おつかれさん、また明日。」

「え、ええ、お疲れ様……。」

そう言つて七日と姪蘭は家へ戻つていった。

「…………。彼女、博麗の巫女と似た空気がしている…………。」

「映姫様？どうしたんですか？私達も家へ戻りましょうよ。」

「ええ、そうですね。」

映姫たちも家へ戻つていった…………。

く家く

「ふう…．．．ただいま。」

「あ、おかえり〜所長おつかrって姪蘭ちゃんじゃない！」

「あ、お久しぶりです、美雨さん。」

「お、帰ってきたのか七日つてその可愛らしい嬢ちゃんは誰だ？」

「私は留宮姪蘭です、よろしく。」

「おう、俺は白縫紅だ、よろしくな。」

「さ、さっさと点検済ましちまおう、スペルの試し打ちもしたいしな。」

「はいはい…．．．慌てない慌てない…．．．。」

そんなことがあって、この日は終了した…．．．。

〜第4話へ続く…．．．。

## 第4話

「逃げ出した罪人と断罪する正体不明」

く幻想郷

地獄く

「ふああ… 今日もまた黒がいねえな…。」

「七日、そう言っているところ悪いですが、仕事ですよ。」

俺があくびをしながらつぶやいていると、映姫がそう言った。

「はいよ、人数は？」

「今のところは13人です、お願いしますね。」

「始めて5分経たずにもう13人かよ…。」

「では。」

そう言って、映姫は元の場所に戻っていった。

「んじゃ、断罪始めっか。」

七日はそうしてどんどん断罪していき、ようやく13人目が終わったとき…。

「ふう… ようやく13人目が終わったく…。」

「七日さくん、助けてくださーい…。」

そう言いながら小町がこちらに走り寄ってきた。

「なにがあつたんだ？」

「そ、それが… 映姫様が黒と判決したやつの中に実体を持つてたやつがいて。」

「んで？」

「そいつが逃げ出しちまったのさ。」

「どこに？」

「地上に。」

小町は即答した。

「えええ…。。。」

「映姫様からもお願いと言われてるんだ、頼む！その間の仕事は代理人にやらせとくから！」

「わかったよ… 行きやあいんだろ。んで？名前は何？」

「ええつと… 蒼魔一拓。だって。」

「ん、りよ〜かい、んじゃ、行ってくるな〜。」

「頼んだよ〜。」

そう言つて七日は地上へと向かつた。

く幻想郷 地上く

「んまあ… 受けたはいんだが…。」

「……………」

「幻想郷って阿呆みたいに広いんだよな（・ω・）」

「………… そうだ… 使い魔にも探させるか…。」

「スperl！召還〔ヘルデーモン〕」

七日がそう言うのと、目の前に空間ができ、中から同じくらいの背丈の悪魔が現れた

「お呼びでしょうか我が主よ。」

「ああ、ちよつとカロナ、探すのを手伝って欲しい奴がいるんだ。」

「はい？名前は？」

「蒼魔一拓だ、頼むぞ。」

「わかりました。手下にも探させましょう。」

そう言ってカロナは飛んでいった。

「さて、これで妖怪の山方面は大丈夫だから、俺は人里の方を見てくるかな。」

七日はそういい、人里へ向かっていった。

く幻想郷　人里く

「はあく…人多すぎだっつの…。」

『今日は野菜が安いよ』

『豆腐はいかがですか』

『魚くださ〜い』

人里は何か祭り事でもあるのか賑わっていた。が、その中で一人困っている女性がいた。

「どうかしたんですか？」

そう聞くと、女性は気づいたようでこう答えた。

「ええ、実は寺子屋の生徒が一人見当たらず…。」

「そうなんですか、じゃあ、俺も探すの手伝いますよ。」

「すみません…お願いします。」

と、女性が言った時だった…。

「うわああああ、助けてくれえええええ。」

「…?」

「何かあったんですかね？」

「ええ、でも何かに怯えたように走って行きましたね。」

「ちよつと追いかけてみましょう。」

「分かりました。」

そう言つて、七日達はその人物を追いかけて行つた。

「ここらへんだよな?」

「ですね…。ここらへんだと思うのですが…。」

しばらく探していると道の途中で息切れしている先ほどの男がいた。

「ああ、いましたよ。」

「あ、本当だ。」

男はこちらに気付き、俺の方を見ると急に顔が青ざめていきこう言いながら走つて行つた

「助けてくれええ! 断罪される!!」

「…! あいつか!」

「あの人なんですか? 探している人つて。」

「ええ。」

七日が男を追いかけていると男は道の途中にいた男の子の首に



隠し持っていたナイフを突き付けこう言った。

「近寄るんじゃないやねえ！近づいたらこいつが死ぬぞ！」

「っ！子供を盾に……！」

「あ！私の生徒！」

「……無駄な抵抗をやめて大人しくしな。」

「ひっ！」

七日がそう脅すと男は驚いたようにナイフを更に男の子の首へ近づけた。

「お、おい！あまり相手を興奮させるな！」

「……ちよつとお願いしていいですか。」

「なんですか？」

「これをあいつに向かって合図したら投げてください。」

そう言つて七日が渡したのは小さな結晶だった。

「……わかりました。」

「じゃあ、お願いしますね、3. 2. 1今です！」

「てやっ！」

女性は持っていた結晶を男に向かって投げた、そしてその結晶は男に当たると強い光を放った。

「ああああ！目が見えない！」

「今だっ！」

俺はそれと同時に走り出した。そして、光が収まると……。

「……ようやく目がって…… あいつは？」

「チェックメイト、お前の負けだよ。」

七日は男の後ろに鎌の柄を地面につけて立っていた。

「成敗！」

「ぐふっ……。」

その言葉を最後に男は気絶した。

「おい、坊主、大丈夫か？」

「う、うん。」

「おおい、大丈夫か。」

「ほれ、あんたの生徒助けてやったぞ。」

「あ、ありがとうございます！」

「あ、そっぴや名乗るのを忘れていたな、俺は留宮七日、断罪執行人だよ。」

「私は上白沢慧音だ、すまない、助かったよ。」

「ああ、俺はこいつ連れて地獄に戻るから、じゃあな。」

「ああ、ありがとう。」

「いいってことさ。」

そう言つて七日は地獄に戻つていった。ちなみに一拓は永久氷結の刑になりましたとさ……。

く第5話へ続く……。

## 第5話

### 「正体不明の幻想郷観光」

く幻想郷

地獄く

「う〜?….:….: つてなんだろう….:….:」

「どうしたのお兄様どこかの吸血鬼姉妹みたいな声出して。」

「ん?んあ….: ああ、そういや俺らつてさ幻想郷に前からいたけど紅魔館と人里しか言っていないな、と思つて。」

「あ、そういえば….:….:」

そんなことを話をしていると映姫が若干嬉しそうにこちらによつてきた。

「七日、そんなあなたにいい事を教えてあげましょう。」

「ん?何かあつたのか?」

「なんと!今日は!罪人が!来なかつたのです!」

「まじすか!」

「マジです。」

「じゃあ、俺と美雨と姪蘭で幻想郷観光してくるからな、あ、家に紅がいるからお昼になつたら紅にご馳走してもらつてください。」

「え、ええ。わかりました。」

「んじやなく。」

「ちよ、待つてよお兄様〜。」

「ちよつと待つてください所長〜。」

そんなことを言いながら七日達は地上へ向かった。

〜幻想郷 地上 霧の湖周辺〜

「ん〜どうすつかなく… 美雨、姪蘭、どこ行きたい？」

二人はしばらく悩んで同時にこう答えた。

「紅魔館」

「え、ええ〜…。」

「お兄様が言ったんじやない…。」

「んまあ… 俺が言ったんだけどさ…。」

「ほら、逝ごうよ所長。」

「ちよつ、漢字漢字！」

「どっちでもいいじゃん。」

「どっちでもよくない！」

そう言つて、俺等は霧の湖から紅魔館へ向かった。

く幻想郷　　紅魔館く

「…… やっぱり寝てるか……。」

「デスヨネー（・ω・）」

「ま、無視してはいるうか。」

俺等は門番をスルーして紅魔館へ入った、入る前、俺が振り向くといつの間にか門番の頭にナイフが刺さっていた。

「仕事がお早いことで……。」

「咲夜さんだね。」

「てことはあのカリスマには伝わってるのかな？」

「じゃね?。」

ギィィィィ……と、音を立てて俺等は扉を開けて入っていった。入ると目の前には咲夜さんが立っていた。

「あら、七日様、いらっしやっただのですね。」

「咲夜さん、レミリアにはもう伝えてますよね?。」

「ええ、伝えてあるわ。」

「なら、こいつら二人をレミリアのところに連れて行ってやってくれ。」

「わかりました、七日様はどうしますか？」

「俺？俺はフランちゃんと弾幕ごっこでもしてくるよ。」

「え、ええ。わかりました。(妹様、頑張ってください)」

俺が地下への階段を降りているとき咲夜さんが十字を斬った気がしたが気のせいだろう。

↓紅魔館 地下↓

カツン、カツン……俺は階段を降りる音しかない階段を下りていた。

「ほんと、くつそ長い階段だよな。お、着いた着いた。」

「……あなた、誰？」

俺がドアに近づくとフランの声が聞こえてきた。

「おいおい、しばらく会わないせいで忘れたか？留宮七日だ、以前あつただろ？」

「え……？七日……お兄様？」

「お兄様って……俺はフランの兄ではないんだけどな……。」

「まあ、入って入って、フランと遊ぼうよ♪」

「ああ、いいぜ。というか、そのために来たようなもんなんだか

ら。」

「素晴らしい、俺が部屋に入った瞬間だった……。」

「スペルカード！幻符【トワイライトクロック】」

そんな声が後ろから聞こえ、その刹那、後ろからフラン並みの弾幕が飛んできた。

「はっ!?ちよ、ま。」

俺は咄嗟に後ろにバク転して避けた。

「おや、よけられてしまいました。妹様に近づく不届きものの割には身体能力の高いことで。」

「ん？何かどっかで聞き覚えがあるような……。」

「あなた、名乗りなさい、名前もわからないものと戦うわけにも行きません。」

「留宮七日、断罪執行人兼探偵事務所所長だ。」

「……!?七日様!?!」

男は俺の名前を聞くと驚いたようにこう言った。

「お、お久しぶりです七日様！執事の潤です！覚えておいでですか?」

「あ、どっかで見たことあると思ったら潤か!」



「え、なに、フラン全然わかんない… 潤とお兄様が主従関係なの？」

「うーん、説明すんのめんどくさいからカクカクシカジカで。」

「メタいね… んでマルマルウマウマなわけなのね。」

「そそ、そんできあ。今ちようど新作スペルを試したいんだよ。」

「て、ことは？」

「潤、審判頼む被弾したら言ってくれ、3機制で頼む。」

「わかりました。では、妹様vs七日様、レディ… フアイト

！」

その言葉と同時に俺とフランは同時に叫んだ。

「スペルカード!!」

〜第6話へ続く…

## 第6話

「フランとの弾幕(ぶつ)っ」

↳紅魔館

地下↳

「スペルカード」

二人は同時にそう叫んだ。

「さっそく、試させてもらうよ、ラストスペル、禁忌【封印された  
暗黒】」

七日がそう言うと、七日の周囲に魔法陣ができ。七日が黒いペールに包まれた。そして、ペールが消えると、七日の頭には黒い輪が浮かんでいた。

「うしっ… 成功だな、んじゃあ、第一段階と行くか、スペル創生【地獄の大鎌】、スペル黒雷【ナイトメアダーク】」

七日はスペルを言うと、キーホルダーを上投げて、大きくなって戻ってきた大鎌を掴んだ、それと同時に、鎌から、黒い稲妻が走り、その稲妻が鎌の先端で黒い玉となった。

「お兄様が新しいスペルを使った…。。じゃあ私も♪禁忌【レーヴァテイン】」

フランは手に持っていた黒い槍みたいなものを大きな炎の剣へと変えた。

「ていやっ！」

フランはその大きな剣を七日に向かって振りかざした

「うわっ、黒雷放出！」

七日はその剣に対して黒い稲妻の玉をぶつけた。そして、しばらく黒い玉と炎の剣はぶつかり合い、しばらくすると炎の剣が黒い玉を切って俺の方に来た。

「くっ！」

「七日様1被弾ですね。」

「なら、第2段階深淵【ナイトメアトラップ】」

七日がそう言うのと七日の周囲から黒い色の弾幕が十字状に襲っていった。

「うっ… 吐き気が… きゃっ！」

フランはその十字の弾幕を見て下を見てしまったため弾幕にあたってしまった。

「妹様、1被弾ですね」

「まだ行くぜ、第3段階、創生【アダマスの大鎌】」

七日は持っていた鎌を黒い稲妻の玉に突き刺した、すると持っていた大鎌はどんどん色を変え、柄まで漆黒の大鎌になった。

「スペル、禁忌【ヘルストーリー】」

さらに鎌で何もない空間を斬った。すると、切った斬撃から空間

がねじ曲がり、無数の弾幕が向かっていった。

「くっ！禁断【スターボウブレイク】」

フランは赤色の弾幕を黒い弾幕に向けて相殺し続けたが……。

「うそっ!?!相殺しきれな……きやつ。」

数には勝てず被弾した。

「妹様、2被弾です。」

「後がない……。こうなったら……ラストスペル禁忌【禁じられた遊び】」

フランは魔法陣をだし、そこから七日に向けて弾幕を放った。

「うっわ……。さすがラストスペル、だが、火力不足♪本気のラストスペル、終焉【死神の神罰】」

七日は、漆黒の鎌で弾幕を切り落としつつ、相手の弾幕が途切れた瞬間、鎌を床に突き刺した、すると刺さった切れ目から黒いオーラが溢れ、フランを包み込んだ。

「はい、このまま続けたら死ぬからやめといてやるよ。」

「それでは妹様の負けでよろしいですね?」

「うゝ?負けちゃった……。」

「ふああ……。エネルギー使いすぎて眠くなってきた……。フラン、

一緒に寝ていいか？」

「え？お兄様がいいならいいけど……。」

「すまんありがとう…… z z z z……。」

「お兄様疲れすぎたのね…… おやすみ、お兄様♪」

そう言つてフランと七日は眠りに落ちた……。

ちなみにレミリアは姪蘭に説得（物理）をされたので泊めさせられました。

↓第7話へ続く……

## 第7話

「霊夢が消えた？」

???  
}

「……今回行く世界は俺と同じ場所か……。だが、複雑な気持ちだな、【俺自身】に会うなんてな……。」

ここはとある場所のとある空間、その人物はスペルを唱えた。

「スペル……。創聖【天地開闢】」

「さあ、行こうか、【あの異変】が起きた世界へ。」

そうやって、その人物は謎の空間に消えていった……。

く幻想郷 紅魔館く

「ふあああ……。ん？何か異様に体が重いような……。」

俺は体に異様な重みを感じ目を開いた……。そこには……。

「な、何しようとしてるんだ？レミリア。」

フランの部屋のはずなのに何故かレミリアが俺に顔を近づけていた。

「え……。？何って……。そりゃあ、あなたをキスで起こそうかと……。」

「残念だったな、俺がギリギリ起きて。」

「ええ、本当に残念だわ。」

レミリアは心底残念そうな顔をしてこう言った。

「ほら、朝食の時間よ。はやく食堂に来なさいみんな集まっているわよ。」

「はいはい……。」

そう言つて俺はみんなと朝食を食べ、紅魔館を後にした……。

く幻想郷 上空く

「さて、そろそろ博麗の所に行くか。」

「えく……。」

「わかりました所長。」

姪蘭は嫌がっていたが、むりやり神社へ向かった……。

く幻想郷 博麗神社く

「あれ？博麗がいないんだが……。」

「どこかに行つてるのかしら。」

「買い物とか？」

「なら、試してみるか……。博麗の奴お賽銭に関しての音は地獄耳だからな……。」

チャリ〜ン…と音を立てて俺は小銭を入れた…が、霊夢は来なかった…。

「え…。」

「え…。」

「え…。」

俺等は驚愕した、あの博麗の巫女が来ない…。

「まじか、これは一回英姫に報告しに行ったほうがいいんじゃない？」

「そ、そそそそうね、はやく行きましょう！」

「急ぎましょう！」

〜幻想郷 地獄〜

俺等は急いで地獄へ戻ってきていた。そして急いで映姫の元へ行くと、こんなやりとりが聞こえた。

「忙しそうね。」

「ええ、まあ。人手不足ですから。」

「少し時間いいかしら？」

「… あなたの来るところではないはずなのだけど、【博麗霊



夢】。」

そう映姫が言うと、霊夢はこう答えた。

「用もないのに来るわけないじゃない。」

「用があっても普通の人間はここに来れないはずなんだから……。」

「あら、七日、戻ってきていたのですね。」

「ん、まあな。」

「まあ、とりあえず。用を言いなさい。」

「何？あんたわからないの？閻魔はなんでもお見通しって聞いていたのに。」

「回りくどいのは嫌いです！」

霊夢はケロツとした顔で……。

「私、死んだのよ、だから地獄くらいはいけるか聞きに来ただけれど？」

その言葉に、俺と映姫は数秒して……。

「はああああああ!?!」「はいいいいいい!?!」

と、地獄中に響き渡るくらいの大声を上げた……。

↳ 第8話へ続く…

## 第8話 「消失による変化」

く幻想郷 地獄く

「はああああ?!」

「せっかく急いできたのに… まあいいわ、今すぐ調べてくれる? 私そのへんで待つてるから。」

「え?! いやー!」

「いやいや… 霊夢、お前本気か? 冗談だろう?」

「この状況で冗談を言っても意味は無いわ。」

「ま、まあ… そうだが…。」

霊夢は思い出したような顔を見ると、こう言った。

「あれかしら…。順番待ちが面倒で三途の川を飛んできたのがダメだったかしら…。」

「船をお使いなさい! あなたの能力は物事を超越しすぎです!」

ふと、俺は思い霊夢に問いかける。

「なあ、確か三途の川に死神たちがいたよな? あいつらどうした…?」

そう聞くと、霊夢は当然かというように…

「ぶっ飛ばしたわ。」

「こらあああ！お前何やってんだよ！」

そんな会話をしていると映姫が話し始める。

「… おかしいですね… 博麗の巫女が寿命ならなんらかの知らせがあるはずなのですが…。」

「やっぱり、お前博麗の巫女として認知されてねえんじゃないのか？」

「言うわね、殴るわよ。」

「私にとってはいまさら驚かれてもってかんじよ、結構前になんとなくわかってたし。」

「結構前っていつですか！私は聞いていません！猫の手も借りたい位忙しいっていうのに何死んでるんですか！本当に死んだんですか!?!」

「そ、そんなこと言われてもなあ…。」

「むうううう！」

「まあ、とりあえず審判は後回しでいいんじゃないか？」

「なんでよ？」

「この前審判書見たけど多分変わってないと思うから。」

「あら、やっぱり？」

「でも、その場合どこに行くんだ？消えるのか？」

「さあ、それはわかりません。」

「まあ、私は別にいいけどね？」

「(前代未聞!!前代未聞の事態です!)」

「で、どーするの？」

「まずは状況確認だろ、非常事態時こそ冷静な判断が必要だからな。」

「その場その場でどーにかすればいいじゃない。」

「お前は人の意見をちゃんと聞けよ…。」

そう言っていると、映姫が大きな鏡のようなものを持ってきた。

「なにこれ？鏡？」

「ここから現世を見ることが可能なんです、素手で触らないでくださいね…。」

「妖怪の賢者である【八雲 紫】博麗の巫女が死んだとなれば彼女が何らかの動きを見せているはず。」

「つまり、紫の私生活を覗けるわけね！」

「いえ、だから。。。」

「すっごい面白そう!」

「私気になってたのよ、あいつが普段何処にいるかとか、何してるかとか!」

「(今代の博麗の巫女は本当に自分勝手だな。。。誰だよあいつを博麗に据えたのは!)」

そう言つて、七日は大鎌を創生すると。。。

「天罰!えいやっ!」

鎌の柄で霊夢の頭を叩いた。。。すると。。。

ガスつと重い音が響き、地面が揺れたような。。。気がしたが、その数秒後。。。

「すごく痛いわ。。。」

「黙れよ。。。」

く覗いてみた

「。。。ええ。。。」

意外な出来事を見てしまった。。。

「え、あれ?何紫そんなこと思ってたの!?超初耳。。。」

「てか… あれホントに紫か？」

「妖怪は基本的に素直じゃないですから、あなたがいなくなつて本音が出たんでしょう…。」

「大体なんで私が死んだこと知らないのよ！おかしいじゃない！」

「これは何か怪しくなってきたな…。」

「まあ、どっちにしても三途の川渡つてますし生き返れませんけどねー。」

く落ち着いたく

「と、まあ現状分かったことを書き出してみました。」

- ・ 死後（？）経過時間は一ヶ月
- ・ 新しい巫女の選定はまだ⇒死んだことを知らない？
- ・ 色々な妖怪が霊夢を探しているらしい…

「結局、お前どこで死んだんだ？」

「さあ？」

「「さあ!？」」

一体これはどういうことだ… 死んだ原因がわからないつて… つつと、七日はめっちゃ内心文句を言いたかった…。

「気がついたら三途の川の前にいたのよ… だから私、(なるほど

私死んだ) って思ってた渡っちゃったわけ。」

「少しは考えるとかしらよ…。」

「もう一人くらい見てみましょうか… あなたに詳しい人物は？  
(今日は仕事諦めよう…。)」

「魔理沙がなくあいつ毎日神社来てたし。」

く魔法の森 霧雨魔法店(魔理沙の家) く

「暇だ… 暇で暇で死にそうだ…。」

魔理沙は魔道書を読んでいた…。

「霊夢の奴… どこに行ったんだよ、この私が探しても見つからないなんて…。」

「そもそも急にいなくなるなんておかしい！絶対私たちをからかっているんだ！」

そういい、魔理沙は立ち上がると…。

「そっちがそのつもりなら私にだって考えがある。」

魔理沙は帽子をかぶると…。

「勝ち逃げなんてさせないぜ？」

箒に乗り、ど空へ飛んでいった。



「とは言っても私一人じゃあこの作戦は上手くいかなそくなんだよな……。」

「そーだ！アリス！あいつも霊夢探しにやる気出してくれたし手伝ってくれるはず！」

そう言って魔理沙はアリスの家へ向かった……。

く魔法の森　アリスの家く

「邪魔するぜ！」

「あら魔理沙いらっしやい。」

「お前まだその人形作ってたのか、作りすぎじゃないか？」

「私……おかしいの……あんなに気に食わなかった霊夢がいなくなっただけでひどく落ち着かないの。」

そう言くとアリスはぼわぼわしながら……

「早く見つけ出して憎まれ口をたたきつつ縁側で茶が飲みたいのよ。嗚呼まさかこれは恋ry。」

「勘違いだ!!誰だって友達がいなくなったら落ち着かない！」

そう言って魔理沙は箒でアリスの頭を叩いた。

「まそっぷッ！」

「ま、魔理沙もなの？（うう……頭が痛い）」

アリスが頭を抱えつつそう聞くと

「わ、私は全くそんなことはないんだぜ！」

「魔理沙……あなた薄情者ね……。」

「だあああ！いいから付いて来いってええ！霊夢を見つけ出す考えがあるんだよ！」

～空中～

「なくそいつら連れて行くのか？」

「ええ、当然でしょう？」

「そか。」

アリスは霊夢人形を連れて行っていた……。

～紅魔館門前～

「よ～美鈴～。」

「はうあ！ああ…お二人共寝てませんでしたよ？船を漕いでいただけ。」

「聞いてないぜ。」

「レミリアはいるか？」

「いるにはいますけど… 七日様が帰ってからなくんか機嫌が悪くて…。あまり近づかない方が…。」

「そか。」

「だが断る！」

「ですよね。」

そういつて魔理沙たちは紅魔館へ入った。

く紅魔館く

「レミイイイリア！邪魔するぜえええ！」

「魔理沙… 扉くらい静かに開けなさいよ… 壊したら怒られる…。」

「五月蠅いわね… 私は今虫の居所が悪いの！死にたくなかったらとつとと帰りなさい！」

「霊夢が見つかった。」

魔理沙はそういった。

「ホント！さあて勝手にいなくなった霊夢にオシオキ死に行くわ！咲夜、外出の準備をなさい！」

レミリアがそう言うと同時に魔理沙はすぐこういった。

「嘘だ。」

「え？何？どゆこと？」

「嘘だ」

「嘘？」

「そう、嘘だ。」

魔理沙がそう言うのとレミリアは部屋の隅でうずくまってしまっ  
た。

「嗚呼・・・燃え尽きたわ・・・うゝ・・・」

レミリアがそうなると同時に咲夜が魔理沙にナイフを突きつけ  
た。

「魔理沙・・・？お嬢様をからかわないでくれる？本当にまいつて  
いるの。」

「お、落ち着けメイド長！ちよつと確認したかっただけだ！」

「なあ、レミリア、霊夢に帰ってきて欲しいよな？もしそうなら私  
に協力してくれないか？」

「協力したら・・・霊夢は帰ってくるの？」

「さあ？でも何もしないでいるよりよっぽどいいさ、私たちら  
しいだろ？」

「それもそうね。いいわ協力してあげる。」

その時後ろから。。

「ああああ！まりさだあああ！」

「おーフラン、ちょうどいいところに来たな。」

魔理沙はフランに同じことを聞いた。

「うん！だって霊夢がないとお姉さま淋しそうだし、私もお兄様としか遊べないからつまらないもの！」

「素直が一番ってな？」

「？」

くそれからしばらくしてく

「あははは！まあくてえく食べちやうぞく。」

フランは霊夢人形を追いかけて遊んでいた。

「フラン大人しくしなさい、これから魔理沙の話聞くのだから。」

「お姉さま！霊夢人形が動いてるよ！すつごく可愛いと思わない？これは全力で捕まるしかないよ！」

「お・と・な・し・く・しなさいー！」

「今日のお姉さまつれないく。。。」

フランはしゅんとしておとなしくなった。

「フラン… 私はマジなの、本気と書いてマジなの。」

「さて、霧雨魔理沙聞かせてもらおうか霊夢を見つけ出す為の考えてやつを、協力してやるんだから半端な考えだったら軽く残りコンテンツにニュー0にしてやるぞ。」

「れくむくわはははは！」

「……………」

魔理沙はふうという話し始めた。

「霊夢はそりゃあ普段はやる気のないぐくたら巫女だ、縁側で茶を啜り大して汚れていない神社を掃除してる。」

「ええ、そうね。」

「そんな霊夢だがある事態に陥るとありえないくらい迅速に行動するよな。」

「霊夢はやる気のないところも魅力の一つだと思うけどね… ある事態… かあ、お賽銭が取られた時とか？まあ、ありえないけど。」

「異変が起きた時だよ。」

「異変か、懐かしい紅魔異変で私達に向かってきた霊夢はかっこよかったわ…。」

「軽く半殺しにされたけど楽しかったよね私も外に出られるようになつたし！」

「魔理沙…： 回りくどい言い方しないで結局何が言いたいのか？」

「アリスはせっかちさんだなはげるぜ？」

「はげないわよ！」

「つまり何が言いたいかってゆーとだなあー！」

【異変を起こせば】 あいつは出てくるに違いないってことだ！

魔理沙はすぐくドヤ顔でそういった…。

「なるほど！それは霊夢抜きにしても面白そうじゃないか！」

「私がメインになればキュツとしてドカーンだよ！幻想郷くらい  
余裕！」

「やめておきなさい…。」

「！パチュリー…。」

「八雲に邪魔されて失敗に終わるのが目に見えてるわ、無駄に怪  
我して何もできずにおしまい…。」

「それに巫女の代わりはすぐに見つかる… 記憶は永遠じゃない  
し直ぐに彼女がいらないことに慣れるわよ。」

「何ナンセンスなこと言ってるんだぜ？魔法使いは常にチャレン

ジ精神を持っていないとなあ、失敗する可能性が高いからつてやめるなんて…。七曜の魔法使いは成長打ち止めだな小さいままだぜ。」

「はあ〜？そ〜？私はあなたたちを心配して言っただけでるんだけど…。」

そう言っつてパチュリーはグリモアを魔理沙に投げた。

「落ち着け当たったら痛い！グリモアは痛い！」

「パチュリー抑えて、魔理沙の言い方も悪いけど…。ね？」

「むきゆううう…。」

「パチュリーの言いたいこともわかる、無駄かもしれない。でもなにかしなきゃ気がすまない…。私にとって博麗の巫女はあいつだけなんだ。」

「忘れることはできない！代わりもない！」

レミリアはパチュリーに向かって落ち着いた表情でこう言った。

「パーチエ？いいじゃないか協力してやろうよ。案外上手いくかもしれないじゃないか…。面白そうだし。」

「レミィ…。あなたホントに【面白そう】なこと好きよね…。仕方ない…。私も手伝っただけ。」

「さあっすがパチュリー！恩に着るぜ！これで百人力！」

魔理沙とフランが喜んでるとき咲夜とパチュリーは…。



「適当に手伝って後始末は白黒に丸投げしてしまえばいいのですよパチユリー様。」

「咲夜… あなたも結構言うわよね…。」

「問題はありません相手はあの魔理沙なんですし。」

「めっちゃ聞こえてるぞメイド長！」

「まあいいか！覚悟しとけよ霊夢ううう！」

その叫び声が異変を始めるのであった…。

〜第9話に続く…

## 第9話

### 「動き始める異変」

く幻想郷

地獄く

「……………」

霊夢はそれを見終わった数秒後走り出した……。

「待ってええい！」

「どこに行くおつもりですか？」

映姫はわかっているながらも聞いてみた、すると霊夢はイライラした表情で……。

「決まってるじゃない、あいつらを再起不能なくらいぐちゃぐちゃにしに行くのよ！」

「アホかお前は！」

「うるっさいわね異変よ異変！私が解決しないとイケないわ！」

「三途の川に帰り道は存在しねえんだよ！渡ったら最後だ！いくらお前が法則を無視できるといっても無理なものは無理だ！」

「じゃあどうしろって言うのよ！紫は使えない！魔理沙は主犯！私がやるしかないでしょ〜！」

「うるせえ！ここでは映姫がルールだ！」

と、映姫と七日と霊夢がやいのやいのしていると…。

「映姫様くちよおつといいですか、あれ？霊夢？何してんだいこんなところ。」

「小町… なんですか？見ての通り私達は今取り込み中なんですよ！」

「いやあ、最近こんな封書が空から落ちてきて…。」

「封書？」

「七日様…。」

「…！潤！」

一方異変組は…。

く紅魔館周辺く

「私も魔術… 魔法？覚えようかしら。こういう時お嬢様方の役に立てないのは齒がゆいわ。しかも潤はどこかへ行ってしまったし…。」

「咲夜さんは今以上強くなる必要はありませんよ。」

「何を言っているのよ私はまだ未熟、もっと精進しないと…。」

「（咲夜さんは人間をやめる気なのかなあ…。）」

「はあ… こんなに危なくてくだらないことをやるの？」

「これなら霊夢も出てくるだろ、いろんな意味で。腕が鳴るぜ！」

「ぱぎぴき〜。」

「妹様… ほどほどにしましょうね。」

「こんな形になるとは思わなかったけど実験としても興味が湧いてきたわ。」

「あなたは霊夢がいなくなってからどこかオカシイわ。」

そしてパチュリーが全員に向けて話す。

「…いい？みんなこれだけは覚えておいて今は霊夢がいないの。」

「それは百も承知だぜ？」

「… 霊夢はなんだかんだで私たちを殺すこともなかったし最終的には許してくれたわ。でも今回の相手は八雲や不特定多数になると思う…。だから命をかける覚悟をなさい、特に魔理沙、あなたは人間なのだから。」

「… 命くらい… かけてやるよ今までだってそうしてきたんだ。」

「私達は命とか賭けられないからあなた一人に任せるわ。」

「おいおいそりやないぜ… さすがレミリアだな…。」

「それは私には褒め言葉ね。」

「おい咲夜！思え人間だろ！命賭けるのに付き合え！」

「嫌ですわ私がこの命を賭けるのはお嬢様と妹様の主のためだけなの。美鈴が付き合ってくれるそうよ？」

「咲夜さんひどいです！私だけは嫌ですよ。」

「気張りなさい、紅魔館の門番でしょう？」

「結局のところ命のやり取りは日常茶飯事、幻想郷には関係ないのさスカートレット家の名に恥じない様最高の異変にしてやろうじゃないの。」

「魔理沙！安心して！私が邪魔する奴は全員ぎゅつとしてどかしてやるから！境界壊そうとすればいいんだっけ？」

「そこまでは言っていないがいいかもな……。」

「行くよ！お祭りの始まりだ！」

それと同時にレミリアは霧を発生させた。

「テンションが上がってきてるじゃないか！私達も負けてられないぜ！」

魔理沙は八卦炉を構え……。

「行くぞ二人共！」

「うん！」

「了解！」

「星魂【ソウルギャラクシー】！」

霧向かって星が混ざった弾幕を放出した。

「名前かっこ悪い…。」

「妹様！シー！」

「おおお上手くいったみたいだなくそいやアリス全部であいつらどのくらいいるんだ？」

「1万體くらいかな、かなり頑張ったのよ？幻想郷全域に回せるように考えて…。」

「思ったより多いな…てかよく考えたらこれやばいんじゃない？一番お前の家に集まってるんだろ？魔法の効果で森や建物は結構壊れるだろくしき…。」

「あ！」

「上海くくく蓬萊くくくマイホオオム！」

「アリスの家と人形終了のお知らせ。」

「幸先のいいスタートね！」

そのころ博麗神社では…。

「おい、紫これって…。」

「黒い霧と星の魔法？魔理沙達が何か始めたようね、まずいわ…かなり強い魔力を感じる…。」

紫は数秒迷ったような顔をし、こう言った。

「新しい巫女を探すわ結界は藍に任せてあるから…しばらくあの子たちの様子を監視しておいて。」

「紫!?!それってっ!」

「異変なら私たちだけでも解決できるけど幻想郷の…妖怪と人間の関係維持には博麗の巫女じゃなきやダメなのよ。」

そう言っつて紫はスキマを開いた。

「行くのか…あの時あんなにぐずって…それは言わないで。」

「私の感情なんて関係ない、霊夢の代わりが必要ななら私には見つけ出す義務がある。」

その言葉をを残して紫はスキマに入っていった。

「紫…博麗の巫女の代わりはいても霊夢の代わりは何処にもいないよ…。」

く迷いの竹林 永遠亭く

「はく… 霊夢がないと病気の治療が全部私の所に来るから忙しいわ。今まで彼女が解決していたのって結構あったのね…。」

そう永琳が言っていると…。

「えくくりん来て！ちよつと来てええ！」

「はいはい… 今行きますよ（姫の相手でもして息抜きしよう）」

永琳が外へ出るとそこには…。

「もこたあくんどろ？ 霊夢ちゃん人形に抱っこされる気持ちは。」

「輝夜ああ！お前見てないで助けるよおおお！」

「いやよびくり潰れるもこたん可愛いもの。」

そこには大きな霊夢人形に抱っこされてる妹紅の姿があった…。そして妹紅は永琳に気づくと…。

「あ！おい医者！助けてくれ！」

「（仕事… しょう！）」

そう言っつて永琳は走って戻っていった…。

（第10話に続く…。



## 第10話 「選ばれし巫女」

〜幻想郷側〜

「へっへっへシヤバの空気はうめくなく！…なんちやつて…。」

「見なさい咲夜！幻想郷が霧で満たされている！ただごとでは無いわ！」

「おっしやるとおりですお嬢様。」

「それだけでも霊夢は解決するべきよね！」

「飛びついてくるに違いありませんお嬢様。」

「そして始まる私たちの破壊活動！いやー楽しいな！実に楽しい！」

「お姉さま私頑張る！霊夢呼ぶためにもものすごく頑張っちゃうよ！」

そのころアリスは…。

「ああ、嗚呼!!あなたたちツ！」

アリスの人形たちは無事でした…。(笑)

〜魔理沙側〜

「ソウルギャラクシーは物体に一つ命令を与え使役する禁忌の魔

法、私たちが与えた命令は【博麗神社に価値あるものを集める！】大抵の奴は金目の者に価値を見出しているからなお賽銭がっぽりだ。異変と合わせてお賽銭ガバガバなことを無駄に鋭い勘で察知し飛び出してくるがめつい霊夢！集まる怨み辛み！それに飽き足らず巨大な霊夢みたいな人形が大地をあらす！やりすぎるなよ！レミリア！フラッソーン。」

「わかってる〜。」

「いじめみたい？そんなことはない勝手にいなくなった霊夢への罰だぞ？」

「あきらかにやりすぎな作戦だと思…って誰に話しかけてるの？」

「これを見ている人にだぜ！」

そこに……。

「あやややややや、なるほどこの騒動はそういう意図があったのですか、いい記事がかけそうです感動路線ですかね〜。どうもどうも、幻想郷の伝統文屋毎度お馴染みみんなのアイドル清くて正しい射命丸ですう！」

「口上が長え!!でたなバカ天狗！」

「いつもは解決する側の魔理沙さんが異変とは……。」

「うるさいな…なんだよ早速邪魔しに来たのか？」

「いやですねえ、こんな面白いこと止めませんよ。」

「なんでだよ？天狗つてのは安定を望むって聞いたぞ。」

魔理沙がそう聞くと文はふう、と一息つき言った。

「霊夢さんには早く帰ってきて貰いたいのですよ、彼女はネタの宝庫、いるだけで紙面が賑わいますから、それに私は霊夢さんが適当に巫女をやっている今の幻想郷が結構好きなのです。」

「文：．． お前：． 何か企んでるだろ。」

「私ってそんなに信用ないんですかね．．．。ちなみにこの異変を受けて我々天狗は大騒ぎですよ。」

「？なんでだ？」

「それはですね．．．。」

くパラッチ説明中く

「ふうん．．．。」

「ただ．．． こんなにおおきな騒動なのに【八雲 紫】の姿が見当たらないんです。」

「霊夢のことを探してるんじゃないのか？」

「魔理沙さんはご存知ないかもしれませんが、博麗の巫女が何かしらの理由で消えたり死んだりした場合、幻想郷の根幹を担う大妖怪が新しい巫女を連れてくるのです。」

「それじゃあまさか紫の奴！」

「いなくなった霊夢さんの代わり次代の巫女を探しに行っている、そう考えたほうがいいでしょう…。八雲紫はぐずっていたのでできるだけ彼女を待つつもりだった、霊夢さんを気に入っていたから。」

「…待てない状況になったのか…。」

「その理由は、もうお分かりですね？魔理沙さんたちが異変を起こしたことで賽は投げられてしまったのです！」

↳彼岸側↳

「小町…：：妙なことがあったらまめに報告しろと言っているじゃないですか。大事な内容が書かれていたらどうするのですか？」

それに対し小町は…。

「そんな差出人もわからないような怪しい封書ですよ？いたずらだと思って。」

「確かに、差出人は書かれてないな。なあ霊夢、一応確認するが心当たりは？」

「あるわけ無いでしょ？開けてみれば？」

「それもそうだな。術の類はかかっているかないようだな…。ふむふむ…。おい、映姫、これって…。」

「…これは…。まさかあの方からの手紙とは…。何枚もある

ということとは一番最初の手紙を出されたのは随分前……ですか……なるほど。」

「これでわかったな。」

「つたく……これじゃ私たち置いてきぼりじゃない気い使いなさいよね。」

「四季様へ読み上げてくださいますか？聞こえてますか？」

小町がそう言うと同時に映姫が立ち上がりこういった。

「そういうことだったのですね！これで白黒はつきりつきましたよ！！」

「あんたの上司大丈夫なの？疲れてるんじゃない？」

「あたいのせいじゃないよ？……多分……。」

「小町は後でお仕置きです……。」

「ええええ……ほら！アレですよ、実は四季様の負担を減らすように思ってたと言わなかったんですよ。」

「嘘を吐くとは尚更悪い！罪を重ねるのはおやめなさい！」

四季はそう言うと言った板（？）的なものを小町の頭に振り下ろした。

「すいませんでしたあああ！！」

「博麗霊夢、やはりあなたの死すべき時期はまだだったのです。」

「は？」

「3人とも付いてきなさい、封書の差出人に会いに行きます。」

「いいけどどこにいるの？」

「三途の川の向こう側です、事情を説明して彼岸まで来て頂きます。」

「三途の川って渡ったら最後なんじゃないの？」

「地獄の民である私たちの様に死という概念がない方なので大丈夫です。」

「ふうん。。。。」

「さ、着きました。少し黙っててくださいね。」

「わかったわ。」

霊夢がそう言うのと映姫が詠唱し始めた、そして詠唱が終わると。。。

「…来たか。」

「何!?!急に天気が悪くなるってどうゆうことなのよ!。」

「すぐにわかります!。」

「何が来るっていうのよ……？」

七日達が差出人に会いに行った頃、現代では……。

〈現代 博麗神社〉

「……また来ちゃった……院長先生怒るかなあまあちよつと寄り道してましたって言えば平気かな？」

そういい、少女は神社の前の階段に座っていた。

「(気味悪い神社なのに……何か懐かしいんだよね……ここ、お母さん達もしかしたら神社かんけいの人だったのかなあ……)」

そう少女が思っていると……。

「こんばんは。」

「びっ」

横から謎のBB……お姉さん(紫)が現れた。

「すみません勝手に入って私怪しいものじゃないんです！おつかいのとちゅうでここ懐かしくてえつとその……。」

それに対し紫は……。

「落ち着きなさいな、どう見ても私のほうが怪しいでしょう？」

「(この人……人間じゃない？……しかもすぐくつよそうっていう

かやばい感じ…?）」

少女は少し考え口を開いた。

「おば… おねえさんどこのゆうれい?ここに住んでた人?」

「残念ながらはずれよ、私は境界を操る妖怪、幽霊は私の友人。」

「やっぱりあなたね、すぐに私の正体を見抜く力を持っている…利発そうな子で良かった、でも外の世界にいるなんて予想外でしたわ探すのに苦労させて… どうしてやろうかしら?」

「なにか… 私に用があるの?人じゃない知り合いはいるけど… 悪いことはしてないよ?」

「用はあるけどあなたに危害を加えるつもりはありませんわ。」

「私はあなたを迎えに来たの、【境界の先にある楽園】へ連れて行くためにね。」

「え?」

↳ 第11話へ続く…



第11話 「差出人は龍神様!？」

〜彼岸側〜

「ね〜いつまでここにいればいいのよ?びしょびしょなんだけど。」

「雨やまないな...。」

「もう少し待っててくださいきつとあちらにも都合が...。」

「... 来るぞ。」

七日がそう言うのと、橋に雷が落ち、煙が晴れるとそこには...。

「はじめまして!やつと会えたね〜博麗霊夢!」

いかにもミニニ〇ーみたいな龍が佇んでいた...。その姿に霊夢は...。

「なにこのうなぎもどき... 気持ち悪い...。」

「はじめましてだな、龍神様、俺は留宮七日。」

「お初お目にかかります、私は四季映姫・ヤマザナドゥお手紙拝見いたしました。」

「無能な部下のせいで拝見するのが大幅に遅れてしまい申し訳ありません。」

「いいよ〜閻魔も忙しいのは知っているし。」

「(龍神? あんな変な奴が?)」

ちなみに龍神の大きさ(映姫)龍神です。

「四季様... 何をたわけたことを言ってるんですか? それ... 全然龍っぽくないですよ?」

「たわけはあなたです小町、さつさと龍神殿に謝りなさいあなたが隠していた封書の差出人ですよ?」

「いいんだってすんだことだし気にしない! 気にしない!」

と、龍神(笑)は言った。

「確かに言われてみれば物凄い力を感じるわ。」

「霊夢お前、私だけを除者にする気かい!」

「面倒なことになったら嫌だからね!」

「でも何故霊夢をわざわざ冥界に呼び出したんだ? 竜宮の使いに伝えて貰えばよかつたんじゃないのか?」

「んんんんんんんんんん、でも直接話したほうがいい内容だったし。僕の話は長いからあの子達は独断で僕の話伝えるんだ、重要な部分はしよられたら困るじゃない?」

「世の上司とは部下に苦労させられるものなんですかね...」

「霊夢には前もって話があるって伝えといたんだけど...。チ

ラッ

「んな話聞いてないわよ。コッチミンナ」

霊夢がそう言うのと龍神が頭突きをしてきた。

「言ったよおおお、ちゃんと龍神っぽく演技して言ったよおお。」

「聞いてないっつてんでしょ！つつこんでくんない！」

そう言うのと霊夢は龍神の頭を殴った。

ピチューーン

「ちなみにそれいつの話？」

「大体二か月前の満月が綺麗な夜のことだったかな……。あれ……。今変な感じがした？」

「ああ！あの【次の満月が来る日……。汝ここならざる地に誘われ新たな世界への扉を開くことになるであろう】ってゆるのあんた？これ死の宣告じゃなかったの？」

「全然違うよおお！わかりにくかった……。？」

「あくこれはあたい打ち首になるかも……。」

「それはなんとか避けさせますまったく……。」

「あ、そっぴやめっちゃ言いにくいんだがそこにいる博麗の巫女、三途の川わっ立てるんだが……。しかも自ら……。」

「え？渡つちやたの？」

「だっていきなり三途の川の前にいたら死んだって思うでしょ。」

「それにしても実体もあるし魂っぽくないというか…生き生きしすぎというか…。」

「あら？…そうなの？…さすが私。」

「ええええええええええお…。」

龍神は焦りながらも霊夢に事情を説明した。

く少女説明され中く

「何？…つまり私は勘違いで死んだわけ？…我ながら阿呆だね…しめっぽく死ぬよりは私らしいかしら？」

そういつたあと霊夢はさらに続けてこういつた。

「てかどくにもならないんでしょ？…もう私のことはいいからさっさと魔理沙たちを止めてきてくれる？…あるいは新しい巫女を連れてきて！…ありがた迷惑なこと…に私のこと探してるみたいなのよね。」

「(ええええええええ反応薄ううう….)」

と、内心龍神は思った。

く現代側 現代博麗神社く

「わたしはあなたを迎えに来たの【境界の先にある楽園】へ連れて行くためにね。」

「楽園って怪しいお店？いちげんさんお断り…。だとかなんとか。」

「(うぐんどこでそんなことを覚えてくるのやら…。外は怖いわね…。)全然違いますわ。こことは別の国と言った方がわかりやすいかしら？あなた不思議な力を持っているわね見えないものが見えたり触れたり。」

「…見たくて見てるわけじゃないよ。」

「それでいつも独りぼっち自分はどこにいればいいのかと考えたことがあるんじゃない？」

「…ないよそんなこと考えたことなんて、ない。」

少女は少し戸惑いつつ答えた。

「あなたを必要としてる世界があるの。あなたの居場所はここじゃない。その力…。誰かのために役に立てる気はない？」

「(この人の言うとおり…。わたしは何の為に生きて誰のために存在するのかよく考えてる今まで私を必要としてくれた人なんかいない、だったら…。この人についていってもいいかもしれない、私が欲しい答えがあるかもしれないし…。)」

少女は数秒考え答えを出した。

「わかりました。」

素晴らしい、少女は紫の手を取った。

「連れて行ってください何の取り柄もないこんな私を必要としてくれるなら… 怪しいお店でもどんと来い!!」

「怪しいお店じゃないって…。(ああ… この表情霊夢に少し似ている… 妖怪の賢者たる私がこんな体たらくではダメね早くこの子を連れて行って魔理沙たちを止めて結界を守らないと…)」

と、紫が連れて行くとしたとき、奥から巫女服の高校生の女の子が歩いてきた。

「はあ… はあ… ねえ… あなたたち… 幻想郷に行くの?」

「…!あなたは?」

「わ、わたしは… 雛乃 秋泊(ひなの) しゅうはく)… 私も幻想郷に連れて行って。」

「… わかりました。そうと決まれば早速行きましょうか。」

「今すぐ行くの!?ほら院長先生に挨拶しないと…。」

「私は人攫いが趣味の妖怪なのでそちらの都合はどうでもいいの、形式として【行く】というあなたの言霊さえあればね。」

「ひゃあああああ、なんか気持ち悪い感触がするよおおくくく!」

「(まっててね七日君、すぐ行くから…!)」

そうして、B B... お姉さんと二人の少女は幻想郷に行くことになった...。

↳ 第12話に続く...

## 第12話

### 「割れた結界と二人の神」

く地上側く

「……おや…… ついにヒビが入りましたね。七日様、大丈夫でしようか？」

紫が二人を連れてきた頃地上では潤が結界にヒビが入ったのを確認していた。

く彼岸側く

「まずいね。」

「結界が乱れ始めたわ紫はどうしてる？ここまで来たら動いてるでしょ？」

「八雲紫はすでに新しい巫女を見つけたようだぞ…… ついでにおまげがいるが……。もうすぐ戻ってくる、だがそいつが使い物になるか……。」

「ちよ、それ僕のセリフだって。」

「不本意だけどきですが紫と言っておくわ。」

「博麗の巫女、わかっているよな？自らの意思で黄泉の国に来た生者は――

「輪廻の環に戻れず消え行くのみ…… でしょ何度も言わせないで、私のことはどうでもいい。」



「でも… それじゃ誰も納得できない君にはやってほしいことが  
まだまだ…。」

霊夢は映姫の方へ歩いていきこう言った。

「映姫、付き合わせて悪かったわね。」

「なっ何をびっくりお待ちなさいびっくり全てを放り出すつもり  
ですか！」

「… 【博麗の巫女】はもう私じゃないもの…。」

「(あ… そうかさつき感じた違和感、霊夢が纏うあの気は僕らが  
持つものと同じ… だから霊夢は人の魂なのに彼岸で存在してい  
れるんだ——だったら!)」

「霊夢ううう！」

「ぐふあっ！」

龍神は再び霊夢に体当たりした…。

「霊夢、七日君!聞いて!」

「話しかけるのにいちいち体当たりすんじゃないわよ…。」

「なんですか? 龍神様。」

龍神はひと呼吸おきこう言った…。

「今の君たちなら神になれる!」

「(はああああ？龍神様の超御乱心だああ！)」

「おい、俺等は人間だぞ？しかも博麗の奴だろあいつは、てか、俺は妖怪だし。神？阿呆なこと言うなよどんな神にも信仰心が必要なのは龍神様が一番知ってるだろ？」

「(ああ…頭痛が痛い…ん？頭痛がする、か？)」

「その通り、信仰心…神仏を崇め信じる心。それだけじゃない、人や物事を信頼し想う心これも信仰心の一種だよ霊夢、七日、君たちはそれを持つてる。君たちが今ここにこうして存在しているのは幻想郷の住民が君たちに向ける信仰心のおかげなんだから。」

「つまり？」

「解りやすく言うと霊夢、七日へのラブパワー？愛の力は偉大だよねー！」

「(何故愛の話に…？てからぶばわーってなによ？)」

と、霊夢は思っていた。

「映姫、お前も信仰心できてるのか？」

「存在の維持とまでは行きませんがね。」

「ふうん…。」

「Z z z z z …。」

と、話していると龍神はどこから持ってきたのか紙芝居的な感じで説明を始めた。

「説明するとね……。」

- ・ 本来生者が生きてまま三途の川を渡るのは無理
- ・ 彼岸で生者は存在を維持できない
- ・ 霊夢の能力は三途の川の掟から浮いている
- ・ 身に纏う信仰心が存在をあやふやにした
- ・ 人間か神霊か神か世界が把握できていない

「というわけなのさ。」

「だから今なら俺達は神になれると？言いたいことは解った、で、龍神様は俺たちにどうして欲しいんだ？」

「僕の意味より君たちの気持ちが大大事だ、今の幻想郷を見て何を思う？。」

「(妖怪大戦争で崩壊寸前…… だな (よね) どう見ても……。)」

「盟友達を見て何を感じる？」

「(めんどくさい奴ら…… だな (かしら)。)」

「【本当の君達】はどうしたい？」

「はっ！俺らに選ぶ権利をくれるのか？龍神様なら俺等の存在の一つ変えることなんて簡単だろうに太っ腹だな。」

「好きにしていいいんだろ？だったら。」

「神になるなんて絶対にイヤ（だね）。」

「ええええそれじゃあこの話が進まないよ！」

「だって博麗の巫女はあの子で大丈夫でしょ、晴れてお役御免よ。」

「俺だって神になんてなりたくもねえよ、面倒くさいんだから。」

「そういうと思いましたよ……。」

「なんて、いつもの俺（私）なら言うんだろうな（でしょうね）。」

「どういうこと？」

「いいじゃねえか。神にでもなんでもしてくれるならなってやるよ。」

「嘘は……ついてないよね？」

「つかねえよ、意味がないからな。」

「そうね。何度も言うけどあいつらは本当にめんどくさいわ、人がゆっくりしたい時もかまわず騒ぐわ暴れるわ飲むわで……。」

「お前も苦労してんな……。」

「でもまあ… 楽しかったのよねこんな時間も悪くないと思えるくらいに。生に未練がないのは本当、まだ霊夢として存在していたのも本当、だったら今しか選べないほうを選ぶわ。」

「そうだな、なぜか俺もあの一回外に出ただけでもう外に出られなくなっちゃったし、なら、神になるしかないだろ？」

俺と霊夢は笑いながらそう答えた。そして二人は龍神の前に跪き。

「龍神様… 幻想郷を守護するための力を… 今一度俺（私）にください。」

「もちろんだよ！じゃあ行こうか！」

龍神はそう答えスキマとは違う境界を開いた。

「行ってくつてどこに？うわ何だその怪しげな穴…。」

「君達の名前は？」

「は？龍神様ぼけたの？博麗霊夢よ。」

「留宮七日だ。」

「でしょ？じゃあ、君たちが帰る場所はどっ？」

「私は… 博麗… 神社ああ、なるほどね博麗の神様に居候のお願いをしに行くわけね。」

「俺もか？」

「そうだね、君も一緒に博麗神社に住むといいよ。」

「そ、そうか……。」「

「よし、力づくで認めさせてやろうじゃない！」

「え!? まずは話し合おうよ！」

「世の出来事は大体力技でどうにかなるのよ！」

と、俺等が意気込んでいると。

「博麗霊夢！留宮七日！」

後ろから映姫が呼んできた。

「映姫……？」

「またここに来るまでにせいぜい善行を積みなさい神になっても魂は同一悔い改めないとまた地獄にこそさせますよ？」

「はいはい。わかったよ、映姫。」

「しようがないわね、そうしてやるわよ。」

「じゃ、行こうか、霊夢、七日。」

そういい、龍神と霊夢達は穴の中へ入っていった……。

↳ 第13話に続く…

## 第13話

「戻ってきた二人の神と新たな巫女」

く幻想郷く

「えっと… 私はここで待つてるだけなんですか？」

「今ちよつとあなた達を連れて行ける状況じゃないみたい、死なれると困るの、説明は後ですからここでおとなしく待っていなさい。」

「ちよつとま…。」

「それじゃあとでね。」

そう言い残し紫はスキマへ消えていった。

「うええええ…。」

少女達がぼんやりと立っていると向こう側から…。

「おい輝夜！犯人わかってんのか!？」

「あら？妹紅にはわからないの？」

「わっわかってるよ！」

向こう側から慧音たちが走ってきて、慧音は少女に気づくと

「君達！子供がこんなところでこんなところにいたら危ないだろう！こっちに来なさい！」



「いや！私達はその！」

「先に行ってるよけけけねけけ。」

少女達は慧音に無理やり小屋に連れて行かれた。

〳魔理沙側〵

「うえけけい… さすがにきついぜ… ちょっと多すぎないか？  
多勢に無勢すぎだろ。」

それに対し幽香は…。

「後ろの子達は私が連れてきたわけじゃないわ勝手に動いてるだけ、それにしても大したことは無いわねあの時の威勢はどこに行ったの？」

ちなみに、幽香が起こっている原因は魔理沙達の霧のせいで動いた霊夢人形に花を潰されたからです（笑）

「私は普通の魔法使いなんだぜ？フランみたいな規格外と一緒にされちゃあ困る、勝負は正々堂々一対一に限る！」

それに幽香はニツコリと笑って。

「あら？これは勝負じゃないわよコ・ロ・シ・ア・イ死なれたらつまらないから手加減はしてあげたわ、さくてこのままいたぶるのも悪くないけど… 今花畑の下働きが足りないのよね…。」

と言っていると幽香の隣にスキマが現れ。

「悩んでいるのなら少し魔理沙を借りるわよ。」

と、言って紫が出てきた。

「八雲紫？随分遅い登場ね…寝坊？」

「よく紫… 霊夢の代わりは見つかったかい？いるわけないけど。」

「新しい巫女は連れてきたわ今は危ないから連れてきてないけど…。魔理沙… もうお止めなさいこんなことしても霊夢は帰ってこない。」

「私も幻想郷を壊すつもりは全くないんだこんなに強い術とは思ってなかったしさ、ちなみにあれの解呪方は霊夢の気を与えることだけだまあぶっこわしてもいいんだぜ？あれに防御結界はつたの前だろ？」

「……………」

「私たちが幻想郷を脅かしたら霊夢は必ず帰ってくるだから他の解呪方は考えなかった、お前は馬鹿な考えだっと思うだろうけどさでもあいつは意外とこの世界を大事にしてるんだ、この方法が一番早い、勿論今だっと思ってるんだぜ！」

「そーいい、魔理沙は閃光手榴弾のようなものを紫に向かって投げた」

「んなっ！」

「なんだ、あいつもまだ霊夢に未練たらたらじゃないか、殺されるかと思ったがなんとかかなりそうだな。」

そういい、魔理沙は飛んでいった。

「閃光弾だなんて… 油断したわ…。」

「あのさ… さっさとあの人形壊しちゃえばいいんじゃないの？」

「いやよ！無理だわ！だってあれ霊夢にそっくりじゃない！」

「(だめだこのスキマ妖怪… 早くなんとかしないと…。)」

く人里 無事だった集落く

「うくん直感で付いてきたけど… やめといたほうがよかったのかなあ… でもなあ…。」

「知らないわよ… でも確かにねえ…。」

と、少女達が呟いた刹那…。

ドゴオオオンっ！という音とともにこんな声が聞こえた。

「邪魔するぞ！（するわよ！）」

「うひゃあああ！」

「あなたが紫の連れてきた巫女ね。」

「うああああ… わわわわたしは…。」

「おいおい… そんな少女をビビらすなよな…。 つて… え？」

「あ、七日君。」

「… まじすか… なんでここに… 【泊師匠】」

「そっちは知り合い？ まあどうでもいいわ、行くわよ！ 平和を守りにね！」

「はいよう。」

「と、その前に忘れてたわね。私は博麗霊夢、もどこの幻想郷の巫女今はあんた達がこれから住む博麗神社の【神】見習いよ。」

「それじゃあ、俺は留宮七日、元この幻想郷の断罪執行人で今は同じく神見習いだ。」

「え？ 神様？ 七日君が？」

「神様？ 博麗？」

と、なんかわんやかんやしていると…。

「ぐおらあああああれいむうううう！ みんな心配してたんだぞ！ もう会えないんじゃないかって… というか扉から入らんか！」

「いいんじゃないか？ 慧音さん、あとで紫達に修理させるんだから。」

「ん？ああ、七日君か、だが資源も無限じゃ…。」

「まあ、詳しい話はいくらぶつ飛ばしてからね！」

「おい！今外は危ないぞ！」

「大丈夫だって！いゝからあんたは里の人たちを守りながら明日の晩御飯について考えてなさい！」

「何故夕飯の心配をしないとならんのだゝゝ。」

「ほら、行くぞ、師匠。」

「そうね、ほら、あなたも。」

「おおおお…。」

神二人は少女と秋泊を連れて飛んでいった…。

「あのゝ… 私は具体的には何をすればいいんですか？」

「紫から何も聞いていないのか？」

「必要だから来てとしか…。」

「(あのスキマ妖怪…！)」

「… あなたがなるのは【博麗の巫女】、簡潔に言うなら調律者、守護者…。つまりはこの世界【幻想郷】の平和を守ることが仕事なのね。いろいろ覚えなさいけないこともあるんだけど…。私は異変

解決に関しては勘だけで通してきたからあなたも勘で何とかしなさい。」

↳紫側↳

「もう結界がぼろぼろ… このままじゃ私達の存在が現代入りするかも知れない…。」

「だからさっさとこの間抜けな人形をさ…。」

と、その時だった…。

「ワキミコワツシヨイ！」

急に霊夢人形が反応したのである…。

「こ… これは霊夢が近くにいるときの反応じゃない！まさか… 本当に帰ってきたの!？」

「… 私はもう帰るわ霊夢に挨拶に来るように言っておいてね。」

と、幽香が離れたと入れ替わりに霊夢と七日達が空から急降下してきた。

「紫っ！」

「霊夢！七日！」

「何こんなになるまで放っておいたのよ！いつもは結界緩んだだけできちゃあぎちゃあ騒ぐくせに！」

「なっ…！それはあなたが勝手にいなくなったからでしょう！  
私は心配して！」

「あんたさくく、なんでこの子置いてくわけ？博麗の巫女をなん  
だと思ってるのよ。」

「だっ！もう！この状況でろくに戦えない人間を連れ回せるはず  
がないでしょう！」

「心配してたのは知ってるのよ…知りたくなかったけ  
ど…。」

と、霊夢は背中から少女を下ろし。

「いつまでのびてんの！あなたの出番よ！博麗の巫女！」

「ぼくがそらとんでぐにゆくどか〜ん？」

「大体どうしたのその姿は!?あなた達人を捨てたの？」

「俺は元妖怪だし。」

「別に捨てちゃいないわよ？むしろ命を拾ったくらいでんまあそ  
の話はあとね！さっさと結界直すわよ？」

「龍神様！手伝ってくれるよな？」

「うわ…なにこの変な龍…。」

「おいおい…師匠この方は龍神様ですよ？」

「オフコ~~~~ッス！ついでに僕が君たちに頼みたかったことも済ませちゃおう！いつくよお~~~~！」

そういい、龍神はいかにも龍な姿をして空に飛んでいった。

「最初からその姿で来れば神々しいのに……。」

「あなた達いつの間に龍神と知り合ったのよ？」

「「ついこの間？」」

「……いい？あのうなぎと紫の力に身を任せなさい、自然とあんながすべきことがわかるはずよ。」

「は、はいっ！」

「いい返事じゃねえか、紫にしてはいい子連れてくるじゃん。」

「まあ、ぜえ〜つたい見直してあげないけど。」

「霊夢……あなたはこんな時でも減らず口をたたくのね……なんだか慌ててたのがバカみたいじゃない。」

「ん~~~~？」

霊夢は紫のその言葉に笑ってこう答えた。

「何言ってるのよ元々あんた達バカじゃない。ば〜か。」

「そうね、あなたの言うことはいつも正しいもの私達は大馬鹿



ね。」

「まあ… そんな馬鹿なあんだ達だったから… 私は…。」

「霊夢？」

「何でもないわそれじゃあいつちよ準備しますか！」

「その前にあなたにはやつてもらいたいことがあるのよ。」

そう言つて紫はスキマを開いた。

「変なことじゃないでしょうね？」

と、その瞬間霊夢はスキマに飲み込まれた。

「ちよつと紫っ！」

「あの人形には、あなたを見つげるため、見つけたら案内させるよ  
うに術にかけてあるの。」

そう言つて紫は霊夢をスキマから放り出した。

「知ってるわ！それがなんだってゆくの!?! うっわ追いかけてきて  
るしー！」

「… 魔理沙達のせいで幻想郷中の大事なものを奪う存在になつ  
ているわつまり結界を壊しているのはあの子達なのよ。そしてあ  
の子達を止めるにはあなたの気をぶつけて【博麗霊夢の存在】を証明し  
なければならぬ。」

「わかったわよ！やればいいんでしょ！いいわあの人を小馬鹿にした顔をへこましてあげる！」

「霊夢… あなたの顔よ？」

「何が私の顔よ！全然似てない！」

と、そう言うと霊夢は飛んだ。

「（と、意気込んだのはいいんだけど今私前と同じように戦えるのかしら、神ねえ… 龍神が言うには私に信仰心があるとかどうかだけど… 胡散臭いし…。試すしかないか。）」

霊夢は人形の後ろに回り込むと…

「夢符【封魔陣】」

霊夢がそう言うと、目の前におおきな火柱が上がった。

「……………」

霊夢は数秒啞然としたあと。

「なにこれこわっ！十倍は威力出るわ！んんく神様の力ってすごいよねえ… いままで適当にぶっ飛ばしてきたけどもしかかしくても手加減してたのかしら？今の私じゃあ力加減できそうにないわね。」

そういい、後ろからきた人形を背負投した。

「あんたたちスペルカードは使わないであげる、どうやら幻想郷

をデコボコにしかねないみたいだからね。とは言ってもね私は殴ったり蹴ったりもわかりやすく得意なんだけどね！」

霊夢は再び飛ぶと人形の顔に向かって。

「天霸昇天脚!!博麗式超破壊拳!!」

人形に向かって蹴ったり殴ったりしていた。

「よし、おもったより弱いじゃない！」

と、落ち着く暇もなく。

「げえー！」

すぐに起き上がるやつもいた。

「ああああ!!【気】を当てろってそうゆうこと!?!素手だと全部に行かないわけ?めんどろくせええええ！」

く紫側く

霊夢が人形相手に頑張っている頃、紫と少女は結界を直していた。

「(どうにか形にはなってるけど...ダメだわ。力が弱くて修復が追いつかない... ゆらぎも多すぎる...)」

「(うなぎに身を任せる感じ... うなぎ... うなぎといえばうなぎゆう?) ↑雑念」

「(龍神がフォローしてくてるんでしようけど… おかしいわ… ただ直すだけじゃなくなにかしようにしている？ 彼が頼みたかったことって… なんなの？ こんなこと考えるなんて私らしくないけど、霊夢なら… どうする？ 行き詰まった時型破りなあの子なら。）」

↳ 霊夢側↳

「だああああ！ぎっけんじゃないわよ！あいつら何匹いのよアリスウウウウ〜！」

霊夢は再び飛ぶと…。

「大体ここまで壊れてるならいまさら山の二つや二つぶつ飛んでもいいんじゃない？ いいわよね？ いいに違いないわ！ というわけで、前言撤回！本気で行かせてもらおうわよ。恨むなら紫と魔理沙にしてよね。」

霊夢はスペルを構え言った。

「スペルカード、ラストスペル【夢想天生】」

霊夢がそう言うと、霊夢を中心にエネルギーの波動みたいなものが全方位に広がった。

↳ 紫側↳

「この気は… 霊夢!?!」

と、そこに七日が。

「はあ… 仕方ない、俺も手伝ってやるよ、師匠、手伝ってくれま

すよね?」

「もちろんよ! 結界術を尽くしてやるわ。」

「おい、お前なにボケつつとしてんだ! さっさと結界修復するぞ!」

「神様!?! いやでも私よくわからなくて。」

「いいか? お前がいた世界とこの世界は裏表の世界みたいなものなんだ世界の間には境界と結界があるんだけどそれが今壊れそうなのわけだ。」

「ふむふむなるほど。」

「それを引き直さないと俺ら消えちゃうわけだお前なら見えるはずだこつちとあつちの境界が、そしてそれは俺等やお前【博麗の巫女】や【神】、【境界の妖怪】の紫にしか直せない。急に連れてこられてなんで私がつて感じだと思うが… 協力できないなんて言うなよ? お前はもう【博麗の巫女】だ、望まれて応えたからこんなところまできたんだろ? だったら根性見せろ。」

「… 神様の言うとおりですね、やると決められたからには頑張らないと!」

「まじか!?! いやあ断られたらどう力押しするか考えたわ。」

「でもまだやり方がわからないんです…。 教えてくれませんか? はくれないのお仕事。」

「んまあ、慣れるまではな。」

「…ぶっちゃけるとようやく私がいる立場がわかりました、正義の味方というわけでもないんですねそれよりもっと大事なお役目みたいな…。」

「まあ、大事っちゃ大事だけど…相手にする奴らが多くてな…それはおいおいお前も実感するだろうが。うっし、そうと決まれば腹に力をこめろ！」

「はい！」

「全身全霊でできる限りのお前の霊力！ぶちかませ！」

「はい！」

「スペルカード！結界符【4重結界】！」

七日と秋白はそう唱えた…。

↳第14話に続く…

## 最終話

### 「異変の終わりとその後」

くパチユリー側 夢想天生発動後く

「……………」

「パチユリーさま！」

「なにこれ…… 私たちの魔法がかき消されていく！」

「…… どうやら、霊夢様が戻ってこられたようですね……………」

くチルノ側く

「大ちゃん！あれ絶対霊夢だ！」

「うん…… あのよくわからないけど凄いのは霊夢さんだ……………」

くレミリア側く

「おおおおお！お姉さま！結界がびきびきいってる！」

「うん！さすが私の霊夢！」

く早苗側く

「これが博麗か…… でもなんか神力を感じるような……………」

「つまりは霊夢さんマジゴッドって言いたいですね諏訪子さま

！」

「間違っではないないと思う！」

く萃香側く

「やったあ！これで結界も大丈夫っぽい！心置きなく開催できるぞおくく！霊夢、七日おかえりおめでとう大宴会くくく！」

く慧音側く

「やれやれだな。」

「なんだありや！」

く七日側く

シユウウウウ…。

と音を立て、魔法陣は消滅した。

「…！」

少女がぽかんとしている。

「私に刃向かうからこうなるのよつと…。」

「あ、神様！」

「おう、霊夢、お疲れ。」

「あんたやるじゃない、これなら私何もしないでもいいんじゃないの？」



「それは無理あるって……。」

「何もしなくても…… 神様が教えてくれたからなんとかあったのに……。」

「私何も教えてないじゃない。」

「いえ、あちらの神様が……。」

「ん？ああ、七日ね。」

「はは、まさかホントにできるとは思わなかったがな……。」

「ちよつと七日君……。」

「まあ、それはいいとしてこれからもその調子で頼むわよ…… 私樂したいし。」

「あ、はい…… 私ここにいいんですよね？」

「当たり前だろ、霊夢はもう巫女できないんだから、お前だけが頼りだぞ？」

「結果も直ったし、魔理沙達の魔法も消せた、うん、文句なしで異変解決！」

「そういえば聞いてなかったが…… お前名前は？」

「私は…… あ。」

少女が名前を言おうとした瞬間、横から何人もの人が走ってきた。

「れええええむうううう（さあああん！）」「なあああああのおおおおかああ（お兄様〜）！」

「どうあー！」

二人はあつという間にレミリアや萃香たちに囲まれた。

「あんたたちどこから湧いて出たのよ…。」

「待ってたんだよ霊夢！あくそば！」

「お兄様、あそびましょうよ。」

「ええく… まあいいか…。」

「このレミリア様の気をもませた人間はあなたが初めてよ！」

「だから俺人間じゃ… もういいや…。」

「宴会！宴会！霊夢、七日！宴会！」

「霊夢さん会いたかった！何も言わずにいなくなるなんてひどいですよー！」

「早苗！あんたまで何すんのよ！掴むな！」

「ぐむぐむううううー！」

「あはは、七日君、霊夢さん大人気ね。」

「どうか。」

「うっとうしい……。」

「へへへ……。やっぱし帰ってきたか、賽銭と異変で霊夢達をつろう大作戦は大成功だな！」

そんな声が出て、振り向くとそこには魔理沙がいた

「考えてたのより大きな異変になってちよつと幻想郷もやばかったけどお前たちならなんとかしてくれるって私、信じてたぜ？」

魔理沙はにこつと笑い。

「おかえり、霊夢！七日！」

「魔理沙……。」

二人はスペルを取り出し。

「魔ああ理い沙あああ！」

「な、なんだよ……。魔理沙さんとの再開がそんなに嬉しいのか？」

「ああ、勿論嬉しいさ、この手でお前たちをボコボコにできるんだからな。」

そうやって七日は鎌を取り出した。

「手伝う？」

「お願いします師匠。」

【終わりよければすべてよし】なんて言うと思った？私がいあな  
い間に滅茶苦茶にしてくれちゃって。」

「この大バカどもが！」

「霊符【夢想封印】」

「黒雷【ナイトメアダーク】」

二人の唱えたスペルは魔理沙たちの方へ飛んでいった。

「ちよちよちよ落ち着け二人共！私たちはただお前たちにだ  
な…。」

「よかった、二人共元気そう！安心ね、馬鹿やってるあの子達を見  
てほっとしてるなんて… 霊夢も魔理沙も七日もいつの間にか私の  
当たり前になってたのかな…。」

「パチュリーさまごあは頑張りました！」

「えらいわ小悪魔。」

「話はあとで聞いてやる。」

「今聞いて欲しい！今すぐ聞いて欲しい！」

「「問答無用！」」

「ごめんなさ〜〜い!!」

そんな声が爆音とともに響いた…。

「不安定なあの子の霊力を無理やり練り上げるなんて… 七日のやりそうなことだわ。」

「型にはまらないのが留宮七日って人間でしょ?」

「龍神… あなた結界に幻想郷に何をしたの?何がしたかったの?」

「境界の、霊夢と七日はどこから来て、誰が連れてきたか知ってるかい?」

「知らないわ、いつの間にかあの子達はここにいて… 私を… 私たちを変えてきた。」

「霊夢達はね、おそらく【幻想郷】が連れてきたんだ、世界を維持するだけではなく変革をもたらすために。」

「霊夢が巫女になってから少しづつ変わってきた、人も、妖怪も、神もそれを取り巻く状況も、それでも世界の移ろいは早すぎて、全てを受け入れ続けているこの世界はそのうちいっぱいになると思わない?だから僕は幻想郷に望まれたであろう存在【博麗霊夢】と【留宮七日】の力を借りて結界のあり方を少し変えようと考えた、簡単に表現するなら【変化とともに広がる幻想郷】を作りたかったんだ。」

龍神はふう、と息をつき再び話を続けた。

「結界を弄つたら幻想郷は不安定になるでしょ、力を借りたいのもあったけどそれを先に言っておきたくて七日を三途に呼び出したんだ、三途なら妖怪も人もいないから話しやすいからね、その説明は一通り七日にしたけど、まさか結界修復中に変えてみせるとはね…：しかも無意識っぽいし…：僕の立場がないね！七日怖い！」

「勝手なやり方ね、霊夢達がいなくなった原因も結果的に人を捨てることになったのも、この異変も根本的な原因はあなたでしょう？」

「…：てへぺろ？」

「…。」

「…：さすがに三途の川をほいほい渡ったことは想定してなかったけど…：彼女があんなに考えなしだとは…。」

「…：基本的にお馬鹿なのよあの子…。」

「でもそこが境界のにとって可愛いんだっけ？」

「あなた性格悪いわね。」

「それほどでも。ちなみに霊夢達を神にしたなりゆきもあつたけど君達や幻想郷がそれを望んでいたからだよ。」

「誰も霊夢達に神になってくれなんて思ってたわ。」

「思ったことはない？」【霊夢達がいる幻想郷が永遠に続けばいいのに】ってさ、幻想郷に愛し愛される博麗霊夢と留宮七日だからね、収

まる処に収まったようなものだよ。よかったじゃない君達が幻想郷に望む限り霊夢達とずっと一緒にいられるよ?」

「そう簡単な話じゃないのよ!あの子の気持ちはどうするの?」

「簡単な話じゃないの?霊夢は言ったよ。」

く霊夢達が神になる前く

「君を変えることになるんだけど、本当にいいんだね?」

「二言はないわ... 博麗霊夢がいつて言ったんだからこれでいいのよ。第一神にされたって私が私なのは変わらないしね、ちよつと寿命が伸びるだけでしょ?問題ない問題ない。むしろあの子がめんどろな仕事は全部やってくれるだろうし。私はお茶飲んで好きな時に妖怪退治すればいいんでしょ?それっていままでより待遇いいじゃない?」

「おいおい... どんだけ自由にする気だよ...。」

く現在く

「...。だつてさ。」

「もうあれこれ考えるのやめるわ...。」

「お後がよろしいようで?」

くその頃の地獄く

「まったく霊夢が巫女としてしっかりしていないからこんな事件

が起きたんですよ、これから長い時間彼女が幻想郷にいると思うと……はあ……頭が痛くなりますね。」

「またまたあくなんだかんだで四季様つてば霊夢が帰れて喜んでたんじゃないですか。」

「ふうん〜そうなのか、さて、姪蘭ちゃん、美雨ちゃんはもうするんだ？」

「そうですね〜私はしばらく博麗神社の方に行こうかと。」

「では、私は所長がいない間の探偵事務所を管理しますよ。」

「そうですね、では3人ともお元気で。」

「おう。」

そうやって紅達はそれぞれの場所へ帰った。

〜幻想郷上空〜

「……光が博麗、闇が留宮……か、光と闇、相反する力はいつかは合わさる。その時お前らはどうなるかな？」

そうやって、謎の少年は空間の穴に消えた。

〜その夜 宴会〜

「霊夢はどこだ〜！」

「知りませんよ〜魔理沙さん……。」



「あ！お兄様もいない！」

「え!?せっかく一緒に飲もうと思ったのに。」

「お兄様く？」

く博麗神社 屋根上く

「よっ…と… あら、先客がいたのね。」

「おう、霊夢か。お前も逃げてきたのか？」

「まあ、そんなところね。」

「にしても、俺等が神… かあ。」

「実感はないけどね…。」

「はは、ごもつとも。どうだ？この酒飲むか？俺特製の神酒。」

「… いただくわ。」

「ほいよ。」

七日が一升瓶を傾けるとチャプチャプと音を立て杯に流れていった。

「ん…。」

「どうだ？味の方は。」

「……おいしい… わね。」

「はは、そりゃよかった。そういや師匠は… あ、いた萃香達と飲み比べしてる。」

「そういやさ、七日、あんたがさつきから言っている師匠ってあの子と一緒にいた子のこと？」

「そ、雛乃秋泊、俺の高校の先輩で俺に鎌を教えてくれた人だ。」

「そう…。」

「にしても、今日は満月だな。」

「そうねえ… あ、そうだ！七日、弾幕勝負しましょうよ。以前はできなかったから。」

「お、やるか。観客もいるし。空中戦ってことで。」

「ええ、やりましょう！」

二人は立ち上がり空へ飛び上がると…。

「スペルカード！」

その声が満月の星空へ響くのであった…。

～END【闇夜の下で】～